

思う。

今後の研究をさらに説得力あるものにするためには、以下のことが役に立つと思う。現地の人たち同士の会話を記録して伝えること。モノ研究と語りの研究は、相互排除ではなく、相互補完的関係にある。村内の社会的出来事を伝えることも役に立とう。重要なのは、男性たちに民族誌のなかに登場してもらうこと。未婚の女性が男性と話すことの困難な社会だと本書で述べられているが、高齢の男性、小中学校の先生、貴州大学の同僚男性などの力を借りて、実現できないだろうか。

最後に、J.スコットのゾミア論の眼差しで、この地域全体をみてみることを提案したい[スコット 2013]。彼の本の第一章は、貴州省南部の複雑に入り組んだミャオの山地に分け入り、混沌とした民族区分や土地所有や方言、ひとつの場所に対する何十もの名づけを前に、途方に暮れている役人による記録から始まり、その他の箇所でも、逃避し抵抗するミャオについて繰り返し記述されている。この眼差しをとおすと、S村の漢族、河辺ミャオ、高坡ミャオの関係が、地形や「文明」の高低をめぐる展開されてきた人々の動態のなかに位置付けられ、そこから中国という国に相対化の光を当てられるのではないだろうか。

#### 引用文献

スコット, C. ジェームズ. 2013 (2009). 『ゾミア—脱国家の世界史』佐藤仁監訳, 池田一人・今村真央・久保忠行・田崎郁子・内藤大輔・中井仙丈訳, みすず書房.

土佐桂子・田村克己編. 『転換期のミャンマーを生きる—「統制」と公共性の人類学』風響社, 2020年, 330 p.

小林 知\*

本書は、2012～16年に国立民族学博物館で行なわれた共同研究の成果として編まれた。ミャンマーでは、2011年に軍政からの民政移管が行なわれ、2016年4月にはNLDを与党とする新政府が誕生した。その前の1988年には1962年から続いたネーウィン体制を動揺させ、後の変革の起点となった民主化運動があった。

本書は、体制移行期を生きたミャンマーの人々の経験とその社会の様子を、統制と公共性に注目して考察する。統制は、軍政期にその社会と人々の生活に深く埋め込まれた。公権力による暴力や制度による管理だけでなく、自己統制の文化が人々によって内面化された。その統制をめぐる変化を問う着眼点が、公共性（公共圏）である。公とは何か、公にとっての善とは何かを自由に語ることが許されなかった時代を長く生きたミャンマーの人々が、それを語り、主張することができるようになったとき、社会にどのような動態が生まれるのか。本書は、その状況が示す可能性と問題を描き出す。

第1部「統制のほころびと新たな公共性の行方」は、1970年代から近年までのミャンマー社会の国家＝社会関係を考察する。第1章『「経験」された統制—社会主義時代に

\* 京都大学東南アジア地域研究研究所

おける農村の調査」(田村克己)は、1979～80年に農村で調査を行なった経験をもとに、「親しい間柄」の関係を束ねたネットワークとしての社会像を示す。当時、外国人の長期滞在者として社会の異分子であった田村自身に、庇護者として接触してきた人物の振る舞いは、「親しい間柄」の機能を表すものだった。政治的な意見も「親しい間柄」であれば吐露できた。そこには、政府が示す公とは異なる公の基礎となる可能性があった。しかし、上位者が周囲に統制を及ぼす回路でもあった。

第2章「民主化運動における『対抗的公共圏』の成立過程」(伊野憲治)は、1988年の民主化運動の再考である。大学生と政府関係者の子弟の口争が発端となって生じた抗議行動は、軍・警察の暴力の犠牲者の声が社会に広く伝えられたことで拡大し、当時の政権を倒す運動となった。しかし、統一性を欠いたまま多様な組織や団体が現れたため、権力の巻き返しに遭った。その後の民主化勢力はアウンサンスーチーという特別な個人の下に「対抗的公共圏」を形成した。しかしその内部は「親しい間柄」のネットワークが溝を埋めぬまま並列するだけで、全体に統一はなかった。

第3章「軍統制下における農村の公共意識と宗教—上ビルマ村落の事例から」(飯國有佳子)は、2000年代初頭の村における統制と公共意識のあり方を考察する。1990年代から市場経済の導入が進むと、都市部では仏教団体が自前の相互扶助組織を形成し、政府も「官製NGO」を多く登場させた。他方、

農村では、仏教に関わる各種の伝統的な共同活動が、結果的に人々の公共的な関心事の中心となっていた。相互扶助が期待できる村という場を維持することは、市場経済のリスクへの下からの対応でもあった。しかし、仏教伝統を拠り所とした公共の意識は、「ビルマ化」を軸とした同化と排除の政治と重なるとき、他者を排除する負の連鎖を生み出す素地にもなった。

第4章「ミャンマーにおけるフェイスブックと公共性の構築」(テツテツスティー)は、2011～15年の情報流通パターンの変化を考察する。統制下のミャンマーでは出版物の検閲制度があり、メディア媒体は政府が独占していた。軍諜報部と志願制の情報提供者による監視体制もあった。しかし、2005年頃からインターネットを介した国外サイトの情報閲覧が可能になった。そして2010年代にはスマホとフェイスブックが急速に普及した。近代通信技術は、政府関係者がフェイスブックを介して陳情を受け付けるなど、従来なかった情報のやり取りを生み出した。ただし、ネット空間での公共性の構築には、利用者側の習熟という大きな課題がある。

第5章「セキュリティ民営化とインフォーマルな国家統制」(岡本正明)は、民政移管後の警備業の発展を事例に、ミャンマーで構築中の公共性の危うさを指摘する。同国の警備業は国軍と警察の退役者を担い手とする。外資企業が進出を本格化させた2010年代に需要が高まり、企業数が急増した。岡本は、政治体制の移行期に暴力団や愚連隊など私的な暴力装置が拡大し、それが結果として民間

のセキュリティ・プロバイダーの母体となったインドネシアなどの例と比較し、セキュリティに関わる中間団体やコミュニティレベルの社会集団の不在がミャンマーの特徴だと述べる。社会の側の主体的な関与が薄い状況は、多様性を尊重した公共の基盤としては脆弱である。

続いて第2部「民主化の中の宗教一競合する公共性」は、上座部仏教とイスラームという2つの世界宗教の信徒がみせる新展開を追う。第6章「仏教を結節点とした『つながり』とその変容」（藏本龍介）が注目するのは、仏教僧侶と在家者の間の影響関係である。統制下の僧侶は、民衆の側に立ち、その意見を代弁する存在とみなされ、尊敬を集めた。そして統制が緩むと、各種の情報媒体を用いて政治的な意見を表明する僧侶の一部が反ムスリム運動を活発化させた。しかし、「マバタ」「969運動」といった呼称で注目を集めたその運動は、2015年の総選挙の過程で縮小した。藏本は、偏狭な仏教ナショナリズムが陰りをみせた理由として、仏教の本質を僧侶から教えられるものでなく、自らが当事者として議論し、考えてゆこうとする新しい在家信徒の増加を指摘する。

第7章「民主化による新たな試練とムスリムコミュニティ」（斎藤紋子）は、全国人口の4%余という少数者であるムスリムの立場から、仏教だけに依拠するのではない多宗教的な公共性を考察する。ムスリムは2010年前後までは国内の一市民として扱われ、選挙参加も促されていた。しかし、ヤカイン州で2012年6月に女性暴行事件に端を発した

信徒間の暴動が生じると状況が一変した。仏教僧侶の政治運動の影響もあり、ミャンマー社会内に反ムスリム感情が急速に拡大した。しかし民主化は同時に、宗教間の対話や平和集会も可能とした。斎藤は自らの宗教活動を仏教徒に紹介する活動を積極的に行なうバマー・ムスリムの姿に、今後の可能性をみようとす。

第8章「説法会を核とする仏教公共性」（土佐桂子）は、仏教に根ざした公共性の可能性と限界を、仏教説法会の変遷から考察する。説法会では、僧侶と一般信徒の間にコミュニケーションの空間が生まれる。それは統制下の社会で、公に関する意見を表明することができた稀少な場であった。その後、反ムスリムを掲げた僧侶らが動員のために利用したのも説法会であった。そして説法会は、転換期以降、仏教徒の内部に顕在化した複数性を反映し、多様化した。それは今日、仏教がつくる公共性をめぐる空間の分断を示すようにもなった。

第3部「マイノリティをめぐる統制と鼓動」では、ミャンマー国内の少数民族の経験を取り上げる2つの論考と、カンボジア及びシンガポールの少数者の文化と政治に関する論考を所収する。第9章「“ガラスの多文化主義”と少数民族のパブリシティ」（高谷紀夫）は、タイ系シャンを事例に、今日の少数民族がその内部の多様な公共性という新たな課題に直面する様子を報告する。ミャンマーの少数民族は、実質的な政治権力を奪われた状態のまま、国家が掲げる多文化主義の象徴的存在として扱われてきた。その人々の

側で注目されるべきは、文字情報や身体パフォーマンスなどを媒介として構築され、共有される知識の表出に関わるパブリシティである。シャンに関しては、民族組織や文化表象に関わる文字や教育が転換期以降に拡充した。しかしそのなかで、これまであまり意識されてこなかったシャン内部の多様性が浮上した。

第10章「少数民族組織の活動にみる統制・公共圏・共同体のありよう—パラウン（タアン）民族を事例に」（生駒美樹）は、シャン州の山間部に暮らすパラウン民族の間に高まる民族意識を分析する。複数の内部集団に分かれ、居住地が山で隔てられ、言語差が大きかったパラウンの人々の間に、ひとつの民族として意識は元来薄かった。しかし、2012年前後にタイを拠点としたディアスポラ組織がつくった民族組織は、文化保護事業やニュース雑誌の編纂・出版を開始し、人々の間に共通の民族意識を醸成した。また、生業に関連した組合活動も新たな凝集を生み出した。しかしそれらは、パラウン人エリートのアデオロギーを受容する場でもある。

第11章「他者化された人々と公共的なるもの—カンボジア農村部のベトナム人の事例から」（松井生子）は、ハンナ・アレントの「あらわれ」という分析概念を援用し、民族対立の根本的解決は遠くとも、顔の見える関係での淡い公共性に基づく対話が行なわれる意義を強調する。カンボジア農村部のベトナム人は、1970年代に国家権力による迫害の対象となり、多くが故郷を離れてベトナムへ避難した。松井が注目するのは、その後カ

ンボジアへ帰還したベトナム人がクメール人の地方行政組織との間に行なう交渉の様子である。

第12章「シンガポールの多文化主義による『統制』と新たな空間の創出」（田村慶子）は、社会の新しい変化を反映した公共圏の創出を報告する。シンガポールの多文化主義は、国民を4つの民族に分け、各民族の宗教や言語を平等に扱いながら国民全体のまとまりを維持することを目指した。しかし、中国との経済関係強化を受けて華語普及運動が始まり、民族間の分化が進んだ。また、移民人口や異民族間の結婚の増加という新しい社会の現実が浮上した。そのなか若者を中心に、新しい多民族社会のあり方を模索する文化的イベントが草の根の運動として生まれた。

民政移管が生じて間もない時期に始められた共同研究に基づくため、各論考が注目した社会の動態はいずれも現在進行中の変化が続けている。この意味で、本書の第一の意義は、変容するミャンマー社会の実像を総合的に描き出した点にある。編者は序文でハーバーマス、ナンシー・フレイザー、コマロフ夫妻、斎藤修、田辺繁治らの先行研究をもとに分析概念としての公共性（公共圏）を設定しているが、個々の論考では共通の問題意識において概念を鍛え直すというよりも、それを広くとって社会状況の記述分析を進めることが優先されている。

新しい状況下で誰がどのように公を語るのかは、移行期正義と並んで体制移行後の社会変動の重要な研究主題である。当たり前とさ

れてきたことと違う考えが口にできる。その期待と戸惑い。そして新しいつながりの形成。体制移行という変化のなか、伝統的な要素と新しい要素が相互に作用し、社会が新しい方向へと動き始めた様子を本書はよく描き出している。この意味で、アジアやアフリカで体制移行を経験した他の国々に関心を寄せる方にも一読をお勧めする。それらの読者とともに、公共性を焦点とした体制移行後の社会の比較研究を進めてゆくことが望まれる。

しかし本書は、そのような潜在的な読者に対して不親切でもある。ミャンマーの地理、民族、宗教、言語は多様性に富む。冒頭に年表と地図、そしてその多様性にまたがって進んだ社会の近代化の様子、たとえばインフラの整備、人の移動などの情報があれば読者層を広げる助けとなったと思う。専門家コミュニティに読者を限定してしまった形は、体制移行後の社会動態という普遍性が高いテーマを扱うものであるだけに、残念である。